私自身ができそうな被災地の農業再生について

右の写真に写っているのは、最近母がスーパーで購入した、福島県産のドライイチゴの食品表示です。「会津産」と書かれています。

「福島県産」と書くとスーパー等で農産物が売れにくいので、「国産」と表示することも増えているそうです。

法律的には、「国産」表示でも都道府県名表示でも、市町村名表示でも構いません。しかし、多くの農産物が都道府県名で表示している中で、「国産」と書いてあると、「福島県産かな？」と思い、そうでないものを私は選びがちです。

モスバーガーの野菜取引量の 3 割が福島・茨城・栃木・群馬であるというニュースに、「知らないうちに食べているのだなあ」と思って調べたところ、セブンイレブンをはじめ外食産業は安値であることから、福島県産や茨城県産の農産物を積極的に使用していました。企業も消費者も知らんふりしたいのではないかと思いました。すなわち、企業側の「安く美味しいものを提供したい」という考えと、私たち消費者の、「安く美味しいものを食べたい」と「福島県産の農産物は危険かもしれないからちょっと嫌だ」という考えが合わさって、「安くて美味しい、福島県産だとは知らなかった食べ物」が流通しているのではないかということです。

講義で先生がご紹介くださった、世界に福島県産の上質な日本酒を売りまくる計画は、非常に魅力的でした。私は、福島県産の農産物は「福島県産」として市場で売り、他の産地のものとその品質で競合すればいいと思います。そうすれば、買いたくない人は買わないし、欲しいと思う人は買えます。

今年の GW に、私は岩手・宮城の被災した沿岸部を巡りました。小さな地方自治体と人々の暮らしを垣間見てきました。そこで実感したのは、その土地で生きる人々、その土地で生み出される産物は、その地を背負っているということでした。はっきり産地を名乗ることがマイナスに働くのはなんと悲しいことでしょう。

私が所謂、風評被害の「加害者」になっているのは、原発に対する国の今までの、そして現在の対応を見るにつけ、国が定めた基準を信頼できず、不安だからです。何が安全か分かるのは、ずっと未来のことでしょう。先が長いことを考えると、つい買い控えてしまいます。

さて、私にできる被災地の農業再生支援ですが、被災地で農業に取り組む若手を、Facebook などで注目することです。

講義でも触れられたように、今、被災地は新たな農業に取り組むには絶好の土地です。まとまった土地が手に入り、しがらみの少ない環境だから、気概ある若者が参入するには打ってつけで

す。震災や原発事故によって、「儲からないし、これを機会に農業をやめよう」と思った零細農家の方は多かったのでしょう。

10 歳違うとジェネレーションギャップが多少生じてしまうでしょうが、20 代～30 代の若者は、SNS での情報のやりとりに精通し、そこで自分たちが注目されたらチャンスに変えていけます。

福島県で新規に、あるいは移転して農業を行う若手農家でグループを作り、それを日本全国の若者が応援したらどうでしょう？例えば、LINE には、広告動画を視聴したり公式アカウントを友達追加したりするとフリーコインを獲得できるシステムがあり、相当数の若者が利用しています。LINE 社の厚意で、あるいはそのグループの資金で、このシステムを利用すると、多くの若者の目に触れます。Google 検索したり、Facebook を見たりしてもらえるかもしれません。「イケてる」「熱い」と思わせることができたら、後は勝手に輪が広がっていきます。贈り物に福島県産の物を選ぶことを、クールと捉える風潮が若者の中から生まれることだって可能です。

東京のファーマーズマーケットを通りかかったら、洒落た小瓶に入ったフルーツコンポートが売られていて、売り手を見ると、ついこの間スマホで見た、福島県の若手農家グループのものだったら？出会いに動かされ、

土壌から離れた意見で申し訳ないのですが、これが、私が実際にやりたいと思うことです。今の日本の若者は未来に希望を持っていないと言われ、その通りだと思います。希望を持てないなら、何かが降ってくるのを待つのではなく、自分たちで希望を作っていくしかないと思います。

先に述べた通り、私はできることなら福島から離れた地域の農産物を食べたいと思っている人間です。しかし、友達が精魂込めて作っているものは応援したくなります。食べた方がよい、と私が心から思えたとき、私の中で福島の農業は再生すると思います。